

第3章 大学と地域を双方向的につなぐ MICT (Mobile Information and Communication Technologies: 携帯情報伝達技術) の活用

第1節 就学支援のための事例検討会における活用方法

1. 目的と方法

(1) 目的

本プロジェクトでは、平成 22 年度からデリバリー式の地域支援活動を行い、いずれの地域からも高評価を得てきた。しかし、さらなるニーズとして地域の専門家に対するスキルアップ研修機会の充実が求められていることがわかった。具体的な要望としては、事例検討会やコンサルテーション、そしてスーパービジョンが挙げられた。

昨年度（平成 23 年度）は、遠隔地における支援機会の確保と大学院教育との接続を考慮した試験的方法の試みとして、MICT (Mobile Information and Communication Technologies) を活用した模擬事例検討会を実施した。虐待の模擬ケースを扱い、MICT を活用することで、デリバリー式の地域支援と並行して物理的距離を隔てた大学内で授業を行い、地域と大学を結んだ双方向の意見交換やディスカッションが可能となった。扱った事例は架空事例ではあったが、参加した大学院生にとっては現場のリアリティを感じられる貴重な経験となったようで、今後このような取組みをカリキュラムに取り入れてほしいとの要望が挙げられた。

そこで本年度はさらなる臨床教育的応用を目指し、MICT を用いて、実際の事例を扱う事例検討会を実施することとなった。

(2) MICT のシステム概要

MICT は、インターネット回線を使用した携帯情報伝達技術である。ネットワーク配信システムにより、物理的距離という制約を乗り越え、情報の即時的共有を行いながら、フェイス・トゥ・フェイスの意見交換、および、ディスカッションが可能となる。

大学側の使用機材は、鹿児島大学総合教育研究棟 7 階スーパービジョンルーム 3 に設置された。スーパービジョンルーム 3 は、20 人程度が入れるスペースとなっており、設置され

た大型液晶（50 インチ）に接続先の様子が映し出され、机上の会議用マイクスピーカーを通じて音声を聞くことができる。一方、地域側の使用機材は、ノートパソコンを中心に携帯可能なコンパクトサイズである。地域側では、ノートパソコンを通して、大学側の映像と音声を共有することができる（そのため、地域側への配信は主として音声になる）。

なお、本システムはインターネット回線を使用しているが、専用ソフトウェアを介して、情報保護の対策が施されたシステムとなっている。

大学側使用機材

製品	品名	型式	メーカー	個数	
デスクトップパソコン一式	Windows Vista	HP Compaq dx7400	HP	1	
	(ワークステーション本体)	SFF			
システムソフトウェア一式	テレビ会議基本ソフトウェア	CONET Collaborator	CONET	1	
	接続ライセンス 1 本	CONETCOL1020			
オプションソフトウェア一式	サイバーカンファレンス EV ソフトウェア	PDA-S08CBL	Pioneer	1	
周辺機器等 一式	マイク	会議用マイクスピーカー	PJP-100UH	YAMAHA	2
	カメラ	コミュニケーションカメラ	VC-C50i	Canon	1
	ルータ	ギガアクセス VPN ルータ	RTX1200	YAMAHA	1
	ディスプレイ	プラズマディスプレイ	PDP-507CMX-JP	Pioneer	1
		ハンドライティングデバイス	PDK-50HW4		1
	キャスター付 ディスプレイ台	キャリアブルスタンド	PDK-MC01		1
		棚板	PDK-MC01T		1
テレビ会議用カメラ置き台		OV-08A	1		

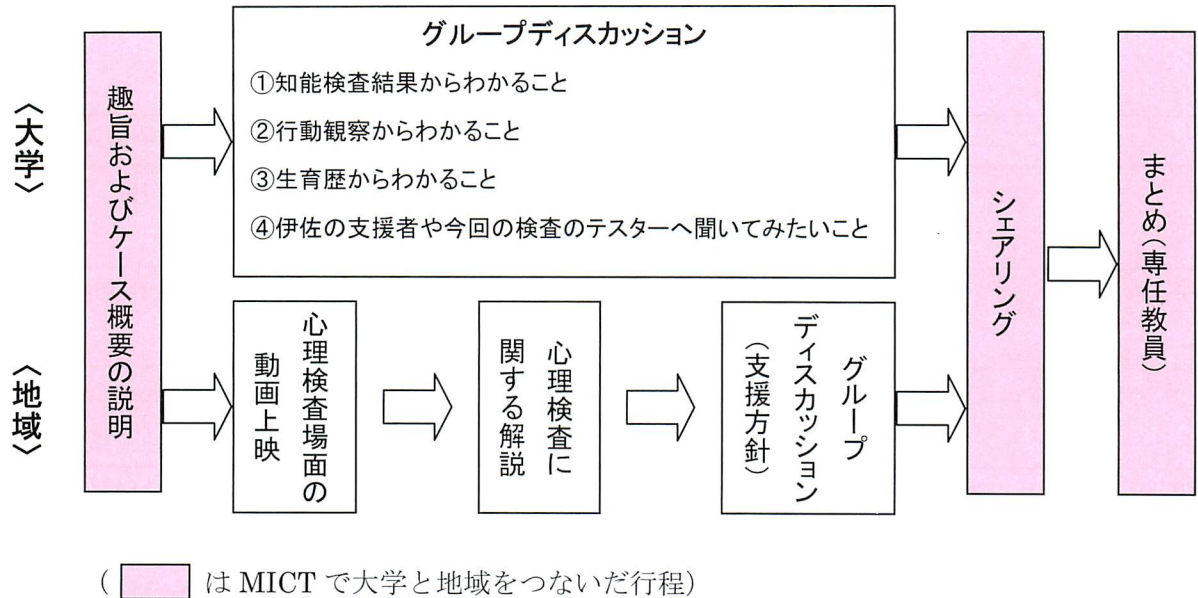
地域側使用機材

製品	品名	型式	メーカー	個数
ノートパソコン	ThinkPad	4058-CTO	lenovo	2
マイク	会議用マイクスピーカー	PJP-25UR	YAMAHA	2
ビデオカメラ	HD ビデオカメラ	iVIS HF S11	Canon	2
望遠レンズ	ワイドコンバーター	WD-H58		1
USB キャプチャーユニット	USB キャプチャー	DC60	EasyCAP	2

(3) 事例検討会概要

大学院生については事例検討会までに事前学習を行った（第2章第1節）ため、当日はグループディスカッションを中心に行った。

今年度は実際の事例を扱うということで、個人情報保護に配慮し、インターネット回線を通してのやりとりは最小限に留め、シェアリングの部分で MICT を活用した。



地域側から専任教員が趣旨説明をしている様子



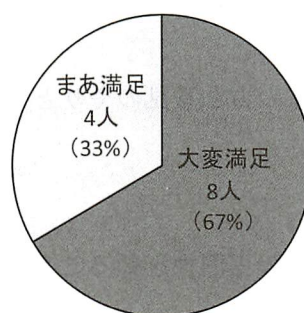
大学院生が地域側に
質問をしている様子

第2節 地域および大学院生からの評価

1. 地域参加者からの評価（アンケート結果の詳細は巻末資料を参照）

事例検討会への地域参加者の満足度は「大変満足」（67%）、「まあ満足」（33%）であった。大学院生からの意見が参考になったという感想もあり、地域支援の臨床実践と実務教育を並行して行えたことが窺えた。

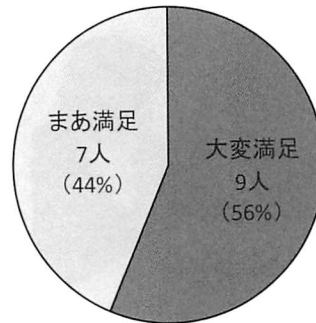
MICTによる事例検討会の満足度



2. 大学院生からの評価（アンケート結果の詳細は巻末資料を参照）

事例検討会への大学院生の満足度は「大変満足」（56%）、「まあ満足」（44%）であった。参加した大学院生全員が、今回の試みを地域の意見をダイレクトに聞くことができる貴重な機会として捉えていた。

MICTによる事例検討会の満足度



また自由記述では以下のような感想が挙げられた。感想からは今回の MICT による事例検討会が、これまでの学内実習や学外実習で学んできた知識やスキルを臨床実践に繋ぐ機会となったことが窺えた。

(1)リアリティの実感

心理職以外も含む地域の専門家のケース理解の視点や実際の関わり方を知ることによって「地域で子どもを育む」ということがどういうことなのかイメージできたようである。

(2)新たな視点の気づき

多機関の専門家から実際の事例に関する意見を聞くことにより、一つのケースへの支援方法が多岐にわたっていることが理解できたようである。また大学院生同士で見立てや方針について話し合うことで考え方の幅が広がったという感想もあった。

(3)充実感・満足感

「学校にいながら地域の専門家の方と意見のやりとりができ、勉強になった」という感想が多かった。

(4)学習意欲の向上

地域での支援の在り方や他職種の専門性を知ることによって、現場からのニーズや心理職の専門性が明確になったようである。また専門性を高めるために必要な知識やスキルが具体化したようである。

(5)デリバリー式地域支援活動への参加希望

MICT を通じた地域とのディスカッションに意義を感じた上で、今後は地域に出向くデリバリー式の活動に同行したいという意見もあった。

第3節 今後の課題

1. MICT の臨床教育的応用

インターネット TV 会議システム (Conet Collaborator) を基本として、ノート PC や会議用マイクスピーカーなどのモバイル機能を付加して構築した本研究科の MICT は、平成 23 年度の模擬事例検討会による試験的運用を経て、今年度は大学と地域を中継した実際の事例検討会を行った。MICT による地域支援および大学院教育への効果は、前節に記したように多彩である。実務教育の中心となる実習は、対面式が基本であり、学生にとって身体・精神的負担が大きくなりがちである。本方式による実務教育は、シミュレーション教育を含めた演習と実習の中間の役割を果たし、安心・安全な学習環境を提供し、学生が主体的かつ積極的に共同学習を行うことを促進する可能性を有している。

MICT を活用した支援・学習という新たなシステム構築は、臨床心理学における高度専門教育の新たな展開となり、単純な技術教育や一方的な知識伝達だけに終始せず、間接参加型実習として臨床能力と全人的教育への応用への期待がある。また、本研究科の平成 20 年度、21 年度大学院専門職 GP「臨床心理実習における客観的評価方法の構築」で行った自己評価型のポートフォリオの導入による自己学習支援とも矛盾しない。しかし、臨床心理学における地域支援と実践教育を結ぶ MICT を活用したリアルタイムでの双方向的カンファレンスの開催は、現時点では時間や労力が相当必要とする特別な事業であり、定期的開催を行うにはその障壁はいまだ大きい。

今後は、1) MICT を使用した複数の事業実施、2) MICT の無線化などによる実用性の向上、3) 音声や画像に関する配信上の質的向上、4) FICT (Fixed Information and Communication Technologies) を含めたデイリーユースでの活用、について検討していきたい。

2. 地域支援における MICT のメリットと課題

我が国の情報通信政策において、地域 ICT 利活用の促進があげられており、少子高齢化や医師不足、協働教育の実現、地域経済の活性化などの地域に共通する課題に対応するために、ICT の利活用は必要不可欠とされている。たとえば、総務省の地域 ICT 利活用モデル構築事業 (平成 19~21 年度) は、地域経済の活性化や少子高齢化への対応、地域コミュニティの再生や安心・安全の確保など、地域の具体的提案に基づき設定された課題について、ICT の利活用を通じてその解決を促進するための取組を委託事業として実施することにより、地域のユビキタスネット化とその成果を踏まえた ICT 利活用の普及促進を図るこ

とを目的としている。ユビキタスとは、いつでも、誰でも、どこでも恩恵が受けられるインターフェイスや環境、技術を指す。臨床心理士が地域に不足し、遠隔地や離島が存在する鹿児島県の現状において、その専門性を地域にリアルタイムで届ける遠隔型臨床心理支援は、今後ますますニーズが高まると思われる。

専門職大学院である本研究科が MICT を通じて行える可能性は、本事業における双方向的な事例検討会以外には、大学からの映像配信による講演会、個別相談事業、事例の行動観察による助言などが考えられる。現時点のシステムでは機材を現地に持ち込む必要があり、事業には必ず現地スタッフが必要となるが、将来的にデバイスに捉われないシステムが構築できれば、PC 端末さえあれば定常的に地域支援が行える環境が創出できる可能性もある。こうした環境は、従来の対面式の個別治療主体の支援から、地域メンタルヘルスを念頭に置いた予防的支援への道を開くと思われる。

地域支援における MICT の課題は、第一に時間・コスト・労力が挙げられる。地域支援であるから、事例選択や広報、会場準備など含めて地域の理解と積極的協力が必要となる。それに加えて、通信環境の確認やリアルタイム配信を行うための機材配置、通信時のビデオカメラやマイクの操作、通信の切り替え作業などである。遠隔地では交通費がかかる。慣れていくに従って負担は軽減するが、システム機器に依存する点が多く、今後の課題である。デバイスに捉われないシステム、タッチパネル、遠隔操作システムの導入の検討を要する。

第二は、情報セキュリティ対策とルールづくりである。個人情報保護条例に則った運用の徹底を行うために、個人情報を適切に管理するための仕組みづくりが必要となる。また、個人情報を扱う際には、利用目的や情報管理主体を明確にした上で本人の同意を得るなど、必要な手続きを確実に踏むべきである。このような手続は、学生が情報セキュリティ対策の重要性を学習する上で教育的効果は高いと考えられる。本事業における MICT は、システム自体に高い暗号化が組み込まれており、一般回線仕様に耐えうる仕様になっている。また、リアルタイム配信ならではのルールづくりも必要となる。進行のタイミング、会話するポイント、回線の質に合わせた会話量や内容、もちろん実際の対面場面以上の言葉の選び方などが関係する。

第三は、地域支援内容と形式の選択である。実施に当たっては、地域の心理支援のニーズを汲み取るために、地域の責任担当者へのカウンセリング的アプローチが不可欠である。本支援は、地域課題を直接解決するのではなく、地域の課題解決能力が向上するための一助として位置づけられる。そのためには、ニーズを充分理解して、具体的支援を選択提示

する必要がある。内容決定は支援の成否に直接関わる課題であり、非常に高い専門性が求められる。事後アンケート結果を得て、分析を行うことも肝要である。今回のアンケートでは、多くの声を聞くことができた、互いの現状を伝え合い具体的なアプローチが見えたなどの体験的な意見が多くあり、形式の選択とおおいに関係すると思われる。

3. 大学院教育における MICT のメリットと課題

本事業においては、事例検討会の開催による地域支援を行ったが、大学院生参加による実務教育との融合を含むために、支援方式は複雑で独特な構成になっている。すなわち、通常の遠隔支援ならば、インターネット会議システムを通じて専門家がリアルタイムで視聴を行い、専門的コメントを返す形式になるが、今回はまだ専門性の点では不足する大学院生が実施を行うために、事例の検査場面ビデオによる事前学習を行い中継に臨んだ。

大学院生からは、学校にいながらも地域の専門家の方と意見交換が行えたこと、事例を丁寧に検討してプロセスが理解できたことなど、実践に近い体験を良しとした意見が多かった。間接的な支援体験においても、実践と共通する現場のリアルな雰囲気、支援の意義と流れ、さらに、新たな気づきを学生に伝えることが成功したと思われる。

その一方で、やはり実際に地域支援に参加したいという意見もあった。MICT を活用した支援参加型教育は、シミュレーション教育と臨床実習の狭間を埋める新たな教育の可能性を開き、安全・安心な学習環境下で学生が主体的に学習を進める手立てだと位置づけるべきであろう。また、実践に即した問題解決型のチュートリアル教育への応用も期待できる。今回は、数名の学生が、MICT の前に実際の地域支援に参加するというチュートリアル教育を想定した授業モデルを試行したので、指導する側の技術開発も必要だと感じられた。

このように将来性に富む大学院教育における MICT であるが、第一の課題は、設営に関する点である。現在のシステムは、スーパービジョン・ルームに設置しており、通常の講義・演習といった授業を行うカンファレンス・ルームではない。機材の常設化を実現し、デイリー・ユースを考える上では、さらにシステムのコンパクト化を進める必要がある。

第二の課題は、映像や音声などの通信の質である。品質の影響は、地域側よりもむしろ大学側に影響が及んだ。リアルタイムでの理解に慣れていない学生は、音声が聞き取れないなどのトラブルで集中が難しくなる。映像に関連するカメラワークも私たちの手によるので、限界を感じた点である。

第三の課題は、半対面式ともいえる臨床心理学的実務教育における専門性の向上にある。学生のコメントからは、体験的理解に確実に繋がるとしながらも、自信の向上までには

至らない実像が浮かび上がる。体験して初めてイメージができる支援の困難さという点を割り引いたとしても、学生の自信と意欲の向上に結び付ける独自の専門性を、国際的視野をもって研究する必要があるだろう。

MICTの教育的応用は、リアルタイムに必要な情報交換をユビキタスに行い、臨床心理学的専門性を地域に届けうる支援と連動する。端末の種類や形式に捉われない配信サービスも必要となるだろう。MICTの最大の利点は、地域と大学における空間や時間を連動し、関係者をより良いマッチングで結び、臨床心理実践および教育が最適化されることである。